特集1

第26回幸田町中学生海外派遣報告

第26回幸田町中学生海外派遣団（生徒13人、引率４人）が８月17日から24日までの８日間の日程でオーストラリアを訪問しました。クイーンズランド州で３日間のホームステイをしながら、現地のヒルズ学園ではスクールバディと一緒に英語で授業を受けました。ラミントン国立公園を歩きながらオーストラリア独自の生態系を学び、カランビン自然動物保護園ではコアラの飼育体験もできました。

今回の派遣団の報告では、ホストファミリーとの心温まる交流や、オーストラリアの大自然の中で感じた思い、体験入学の思い出などを報告します。

将来に繋げるホームステイ

幸田中学校
横田（よこた） 愛実（あいみ） さん

初めて経験するホームステイに、私は不安と緊張を感じていました。そんな私をホストファザーが庭に連れ出し、星空を指差して、あれが「サザンクロスだよ」、と教えてくれました。広い夜空にはたくさんの星が輝き、「ミルキーウェイ（天の川）」も見ることができました。オーストラリアの自然を体で感じることができ、大切な思い出になりました。ホストファザーの優しい心遣いのおかげで、星空を見ていたら、私の不安や緊張もほぐれていき、心が通じあえました。残りのホームステイの時間が楽しみになりました。

また、私の生い立ちや日本の文化などを紹介するために作ったアルバムをホストファミリーに見てもらいました。妹と着物を着ている七五三の写真では、会話が弾み、楽しい時間を過ごすことができました。

ホストファミリーは、私たちが理解できるように簡単な単語を使って、ゆっくりと話してくれました。英語が理解できたり通じたりすると、とても嬉しく、自信になりました。その一方で、まだまだ自分の英語力が十分ではなかったため、うまく伝えられなかったことがたくさんありました。でも、お互いに理解しようとする心を持っていたので、分かり合えたと思います。

今回のホームステイでは、たくさんの人の温かさと優しさを感じました。その一つ一つに感謝したいです。

最後にホストファミリーからもらった手紙に「あなたの経験が将来に繋がることを願っています」と書いてありました。手紙のように、この貴重な経験を必ず、将来に繋げていきたいと思います。

また、これからも、星空を見るたびにホストファミリーとの繋がりを思い出したいです。

第26回幸田町中学生海外派遣団員

＜幸田中学校＞
横田（よこた） 愛実（あいみ）、喜多（きた） 恭子（やすこ）、佐野（さの） 玲奈（れいな）、
手島（てしま） 瑠美（るみ）、藤井（ふじい） 七夢（なむ）、木下（きした） 和哉（かずや）

＜南部中学校＞
永谷（ながや） 巴琉（はる）、三浦（みうら） 蒼生（あおい）、稲吉（いなよし） 桃子（ももこ）

＜北部中学校＞
石川（いしかわ） 理紗（りさ）、鈴木（すずき） 蘭菜（らんな）、甲村（こうむら） 美歩（みほ）、畔柳（くろやなぎ） 徹郎（てつろう）

＜引率者＞
内藤（ないとう） 節夫（せつお）、持田（もちだ） 崇（たかし）、川合（かわい） 佳織（かおり）、夏目（なつめ） 慎子（ちかこ）

順序不同・敬称略

動物たちと生きるオーストラリア

南部中学校
三浦（みうら） 蒼生（あおい） さん

今回の海外派遣で、貴重な体験をたくさんさせていただきました。私は、オーストラリアの自然や文化にとても興味があったので、実際にそういうものを目で見て、そして肌で感じてくることができてよかったです。

オーストラリアは、私が想像していたよりも自然が豊かな国でした。バスの中から外を眺めていると、カンガルーがいたり、野生のコアラに注意したりするための標識などもありました。オーストラリアの人たちは、動物たちと一緒に暮らしているのが当たり前のようでしたが、それはすごいことだと私は思います。動物や自然を本当に大切にしていて、コアラやカンガルーをはじめ、オーストラリアにしか生息していない固有種を、自分たちで守っていこうという姿勢がいろいろなところで感じられました。そのため、動物保護に関する法律も日本と比べて非常に厳しいものでした。私たちが訪れたカランビン自然動物保護園では、保護のための様々な動物保護プログラムが行われており、貴重な動物が絶滅してしまわないように、飼育員さんたちは必死の思いで動物たちの世話をされていました。また、短い時間でしたが、動物を保護するプログラムについて説明を聞き、飼育園の掃除やコアラの給餌の手伝いもさせてもらいました。貴重な自然や動物を守っていくために、陰でたくさんの人たちががんばっていることがわかりました。

私はこの時まで、絶滅してしまいそうな動物のことなど、あまり考えたことがありませんでした。飼育員さんたちが熱心にコアラの保護について話してくださる姿を見て、自然を守っていくために、私にもできることはなんだろうと考えました。小さなことですが、動物保護プログラムについてもう少し詳しく調べたり、自然を守るための環境問題について考えていきたいと思います。今回の派遣で気づかされたこれらのことを、これからの私の将来へとつなげていきたいです。

文化の違いはあっても

北部中学校
鈴木（すずき） 蘭菜（らんな） さん

今回、私たちは海外派遣の一環として、ヒルズ学園に通わせていただきました。そこで私は、日本の学校との違いをいくつも感じました。

まず、ヒルズ学園はとても敷地が広く、外に出ればゴルフ場が遠くの方まで広がっているのが分かりました。ゴルフの選手も育成していてすごいなと思いました。また、カフェテリアがあり、お昼の時間になると徐々に生徒たちが集まってきて、自分の好きなものを取って食べられるようになっていました。

学園では主にバディの子と行動を共にしました。一緒に授業を受けたり、外で遊んだりしました。授業は先生の話すスピードがいちだんと速く聞こえ、配られたプリントに追いつくのに必死でした。日本語の授業も充実していて、小学生の子でも数字を日本語で言えていましたし、中学生になれば日本語をローマ字で書くことができて、声を合わせて朗読していました。授業の雰囲気は、とても自由な感じで、放課後になると、みんな外に出てそれぞれが体を使ったスポーツを楽しんでいました。日本の中学生は体育と部活動の時間以外、学校にいる間に外でスポーツをしないので驚きました。

交流の最後に、ヒルズ学園の皆さんにソーランを披露しました。私は練習のとき難しくてなかなか上手に踊れませんでしたが、それでも何とかついていき、本番では無事踊りきることができました。終わった後に大きな拍手を耳にしたとき、今までみんなで一生懸命練習してきて良かったなと思えました。ソーランの後、バディの子から、「さっきの踊り、教えてよ」と言ってもらい、一緒にソーランを踊って触れ合うことができました。やってよかったです。

交流を通して、文化の違いはあっても、共に遊んだりソーランを踊ったりして楽しむことができて、同じ中学生なんだなと実感しました。英語力を磨いて、もっと他の国の人とも交流を深めていきたいです。

本気になって挑戦すること

団長 北部中学校
内藤（ないとう） 節夫（せつお） 校長

今年度の海外派遣は、派遣先がオーストラリアに変更となりましたが、団員の健康や天候にも恵まれ、充実した研修となりました。

訪問先のヒルズ学園は、ゴールドコースト市にある私立校で、地元の子どもたちを中心に、小1～高3までの500人程が学んでいます。ゴルフ課程が有名で、200haを越えるユーカリ林の中にゴルフコースがあり、その真ん中に平屋の校舎が建っています。

また、ヒルズ学園は、留学生の受け入れにも熱心で、私たちが訪問した時も、愛知県の高校生を中心に百数十名が滞在していました。受け入れプログラムもしっかりしており、最初に、日本人教師の通訳のもと、授業やホームステイの説明がなされました。

派遣生は、世話役の子とも次第に打ち解け、最終日に小学生を相手に行った日本についてのクイズは大いに盛り上がりました。また、ホームステイは、シャワーの時間が5分以内といった習慣の違いに戸惑いながらも、身振りを交えて意思疎通を図り、現地の生活を体験する又とない機会となりました。

この研修を通して派遣生が学んだのは、何事にも本気になって挑戦することの大切さだと思います。貴重な学びの機会を与えていただいたことに感謝するとともに、この経験を今後の生活に活かし、各校において広めることで研修の成果にしたいと思います。

問合せ　学校教育課庶務G（内線422）